

論文の要旨

論文題目 在日朝鮮人文学における「朝鮮的なもの」
—金石範の作品を中心に—
氏名 呉 恩英
学位 博士（文学）
授与年月日 平成24年7月31日

主論文の要旨

本論文は、「在日朝鮮人」の形成、日本文壇における在日朝鮮人文学の評価、金石範が作家活動をするようになるまで大きな影響を受けた組織などについて検討した上で、金石範文学の全体像を考察した。

金石範と彼の文学について論じる際、4・3事件をテーマにした作品を中心に、民族主義者の描く抵抗的民衆像というイメージがステレオタイプ化されてきた。しかし、事件以外の出来事を素材にした作品を考えるならば、それとは多少異なる印象を受ける。むしろ在日朝鮮人や組織をテーマにした作品の主人公は、民族主義者としてありのままの自分を見せようとするよりも、堂々と行動ができなかった自分を正当化しようとしている。これまでの先行研究では、このような在日朝鮮人の内面性に注目するより、表面的、公式的な捉え方に傾いていた。しかし、内面に立ち入って見なければ金石範文学の本質は見極められない。そのためには、4・3事件だけでなく、それ以外の作品や、金石範が関わっていた「組織」についても考察する必要がある。また作品の文体、そこに現われる在日朝鮮人の文化などの観点から、在日朝鮮人文学において金石範文学がどのように位置づけられるのかを考察し、金石範文学を再評価しなければならない。

まず、第一章では、在日朝鮮人が日本に定住するようになった経緯を通じて彼らのイメージや日本共産党との関わり、日本文壇における評価など、在日朝鮮人をめぐる様々な問題を再検討した。

在日朝鮮人が日本に定住するようになった理由は、戦前、戦中は植民地時代に朝鮮での経済的困難や強制連行、戦後は朝鮮半島の南北分裂や、済州島4・3事件による日本への逆戻り現象など、様々であるが、その中でも強制連行のイメージがまだ強く残っている。在日朝鮮人におけるこの被害者意識は、日本では、戦前に、皇民化していた朝鮮人が戦後は「日本人」から外国人として扱われるようになり、また韓国では、日本に協力した「親日派」への敵愾心が強かったことから生じたと言えよう。そのため、彼らは日本と朝鮮との狭間でどちらを選択するかに悩み、この意識が子供にも影響を与え、転化しているのである。

このような集団的な被害者意識は4・3事件についても見られる。この事件は、地縁、血

縁などに結ばれた日本在住の済州島出身者に大きな衝撃を与え、彼らは事件への思いを共有している。金石範もその一人として植民地に対する記憶や 4・3 事件を自分の記憶と見なし、それを作品にも取り入れている。これが、日本文壇で金石範の作品が注目された理由でもある。他の作家の私小説的な作品とはちがって、金石範の作品には、作品の舞台を主に朝鮮に設定し、当時タブー視されていた事件が語られている。

第二章では、金石範が民族主義者になるまでの生き立ちを追いながら、在日朝鮮人及び金石範文学における「組織」が彼らに与えた影響や金石範の作品における組織はどのように描かれたかを考察した。

金石範は、独立運動や新生祖国建設に参加するために朝鮮へ渡ったことがあるが、戦後日本に戻り定住した。その後、日本共産党や組織に携わったが、組織の厳しい活動に堪え切れず離脱して虚無的な脱落感に陥った。

戦後まもなく結成された組織は幾つかあったが、その中で左派、共産主義の組織に多くの在日朝鮮人が頼っていた。当時、組織は、戦後まもなく朝鮮学校や組織内の文学活動などによって在日朝鮮人に大きな影響を与えた。始めは取り立てて拘束することが無かったが、総連になってからは北朝鮮の支援を受けるようになり、朝鮮学校の教育理念が変化し、文学活動においては朝鮮語で書くことなど、文学政策に従うように規制された。ところが、日本で生まれた、あるいは日本で教育を受けた作家たちにとって、朝鮮語で文学活動を行うことは容易ではなく、歴史と組織の背理がもたらす言葉の二重性に葛藤する要因を作ったとも言えよう。

また組織は、男女共学を徹底的に実施し、女性の教育にも力を注いだ結果、女性も組織の中で活動するようになった。しかし、1960年代の組織における女性たちの役割は、愛国的母性を身につけることであった。この「聖なる母性」というイメージは、単なる母の姿と総連の教育によって育まれた強い母性（女性）像が重なって在日朝鮮人文学にも表われるのである。

金石範の組織をテーマとした作品（「途上」、「往生異聞」など）には、組織に対する批判や悩み、葛藤が描かれており、次第に主人公の心理描写が多く表われるようになる。主人公たちは、伏魔殿に変化しつつある組織からの離脱あるいは脱落を問題にしながら、何とか組織にしがみつこうとしている。

このように金石範の組織を素材にした作品には、「親日」でも、「共産主義」でもなく、また「転向」者でもない、ただの「在日朝鮮人」の有り様が描かれている。換言すれば、どちら側にもつかず、それでも組織にだけは何とか繋がっていたいという主人公の矛盾した心情が現われている。また他の作家の作品より組織に対する批判が消極的であり、作品の登場人物の決断できずに逡巡する心理描写が中心になっているのが分る。

第三章では、金石範が強調した「朝鮮的なもの」の描き方やその要素に注目して作品を考察した。金石範は、金史良の作品のように、人々の共感を呼び起こせるような朝鮮人の感情、感覚を作品に取り入れる、という「朝鮮的なもの」の表現に拘っていた。彼はまた

日本語で作品を書く際、朝鮮人としての主体や作家としての主体を確立することも重要視していた。

ところが、多くの在日朝鮮人作家の作品と比べ、金石範の「朝鮮的なもの」の描き方には不自然さが感じられる。これは、彼が私小説的な表現を回避し、日本にある「朝鮮的なもの」ではなく、彼自身があまり知らない観念的な「朝鮮」、「朝鮮人」の感情や感覚を表現しようとしたからだと考えられる。つまり、金石範の作品は、朝鮮を舞台にして「朝鮮」と密接に関わるものを書こうとし、日本を舞台にする場合も、日常生活ではなく、「組織」や「4・3事件」を中心に据えているのである。

金石範の作品における「朝鮮的なもの」には様々な要素が取り入れられているが、その中で身体的感覚表現としての「におい」、祭祀、シャーマニズムを中心に作品分析を行った。金石範の作品に身体的感覚表現が多いのは、彼のことばに対する強い意識や、身体は日本に居ながら心は朝鮮を渴望しているという葛藤から生じるものだと言えよう。

主人公たちは、自らが「朝鮮」を思い起こすのではなく、主に女性の「におい」を通して「朝鮮」を連想する。すなわち、女性の「におい」は、主人公を行動へと駆り立てる牽引力として現われており、「朝鮮」へと導く契機として重要な役割を果たしている。ところが、「朝鮮」や「4・3事件」についての女性の意識あるいは女性の立場はあまり描かれていない。主人公たちは、女性を性的に常に受動的存在に仕立て上げようとし、あたかも〈声なき肉体〉のように表現し、それによって「女」の強さを恣意的に観念化する姿勢が窺える。また語り手は、彼女たちとの関係を4・3事件に結びつけ、その性的支配を正当化し、ロマン化しているのではないかと考えられる。

このような表現形式は、祭祀とシャーマニズムにも同様に認められる。語り手は、日本において「朝鮮」を味わう唯一の空間である祭祀について語る際、その準備に苦勞する女性たちが重要な役割を果たしていることは示しているものの、その内面的心境までは捉えていない。この祭祀やシャーマニズムの描写においても、男性主人公の女性への眼差しは、儒教的な考え方に立つ男性支配的イデオロギー、男性優位主義がベースとなっていると言えよう。

金石範文学をはじめ、在日朝鮮人社会全般において朝鮮の文化を受け継いでいる中心的存在が「女性」であることは間違いないだろう。これをより明確に象徴するのは、朝鮮服と言えるが、その呼称は時代とともに変化し、そこに「在日朝鮮人」の自意識の変化が読み取れる。すなわち、それはただ朝鮮、祖国、民族を表わすイメージから、戦後のある時期から、母としての祖国という「女性」を連想させるイメージを強めていくのである。ここにはまた、朝鮮服を女性が着るものとして女性の側に民族的な義務を移行させ、それを通して男性たちがすでに失いつつある民族的アイデンティティのよすがを守り続けようとする願望も窺い知ることができる。

第四章では、済州島4・3事件を史実として検討した上で、金石範の4・3事件をテーマにした作品の中でも朝鮮を舞台にしたものを中心に考察した。

1948年に済州島で起きた4・3事件は、済州島民を含む武装隊が、いわゆる南朝鮮だけが単独選挙を行なうことに反対して蜂起した事件で、アメリカの支持を受けた政府によって大勢の人々が犠牲になったものである。この事件は、朝鮮戦争の勃発などによって南朝鮮では「反共」意識が強かったため、長い間タブー視されていた。

金石範がこの事件をテーマにしたのは、一つには、済州島が母の故郷であり、彼の第二の故郷で事件が起きたことに衝撃を受けたためである。だが、それ以上に、彼を絶望感や虚無感に陥らせた組織の経験が事件を作品化する原動力となった。

この事件を扱った代表的な作家は、日本では金石範、韓国では玄基榮が挙げられる。玄基榮の作品では、島民側の視点から島民の被害や事件を語るのが中心になっている。これに対し、金石範の作品では、登場人物のイデオロギーに焦点が当てられ、島民より武装隊側の視点から、武装隊が事件をどのように起こしたのか、この事件が朝鮮と日本、そして在日朝鮮人とどのような関わりを持っているのかが描かれている。またこのイデオロギ的視点からアメリカと「南」の政府批判に傾いている。

この4・3事件をテーマとした金石範の初期作品（「看守朴書房」、「万徳幽霊奇譚」など）は朝鮮を舞台にとり、語り手が主人公を無理やり英雄に祭り上げようとする設定、また軍警側の下で働いている愚鈍で素性の分らない主人公が、ある日突然あるきっかけから軍警側の残虐性に気づかされるなど、語り手と主人公との間に大きい溝があり、文体も不自然さを感じさせる。「鴉の死」や『火山島』には、主人公の事件に対する見方を問題にするより、主人公が自身の行動に躊躇する様子や武装隊側の視点から事件を見る傾向があり、そのために読者に対する4・3事件の説明としては客観性を欠いていると思われる。

これらの作品にも、女性の「におい」などを通して事件に関わろうとする主人公の行動は、積極的とは言えないが、行動を喚起するものであり、金石範の作品全体において語り手と主人公の4・3事件に対する強い執着と信念が感じられることも否定できない。

第五章では、「在日朝鮮人」をテーマにした「糞と自由と」（1967年）、「虚夢譚」（1969年）、そして『1945年夏』（1971～1974年）を中心に、主人公の二律背反する心理とその描写技法について考察した。これらの作品では、戦前戦後を背景として主人公たちが歪んだ世間を見つめる眼差しと、主人公の自己矛盾が交錯するグロテスクな表現形式が選ばれている。

金石範の作品の主人公は民族主義者のイメージが強い。特に、ここで取り上げた三つの作品の主人公たちは民族主義者（のつもり）「であった」という過去形で物語られている。すなわち、主人公（話し手）の民族主義は少なくとも現在は観念的なもので、行動に移されることはなく、観察するだけにとどまっている。また作品中の人物たちは民族主義、独立運動の夢を実現できなかった原因を、自分自身の懦弱さではなく、当時の状況に押し付けようとしている。

この登場人物の心理描写には、民族主義者や裏切り者、笑い、グロテスク、断絶感、違和感など、歪みを感じさせる共通の要素が使われているが、これは金石範作品全体に表われているといっても過言ではない。「虚夢譚」のように、現実にはありえないことをグロテ

スクな夢で実現し、困難な状況と、「涙」や「笑い」が交錯することによって主人公の思考をより皮肉で滑稽なものに見せる効果をもたらしている。つまり、これらの要素は、「日本」と「朝鮮」、あるいは「民族主義者」と「裏切り者」の間を往きつ戻りつする思考過程の中で醸し出されるものだと言えよう。このように「日本」と「朝鮮」の間に立って断絶感や違和感、そして優越感と劣等感を混淆している主人公の感情には、アンビヴァレントな思考も露呈していることが分る。

以上、本論では金石範の作品を中心に考察した。彼の作品には、抵抗的な民衆像より裏切り者（親日）にならないように必死にもがいている在日朝鮮人像が現われている。この逡巡する主人公を正当化するための表現として「朝鮮」と関わる「朝鮮的なもの」の表現が多く取り入れられており、そこには観念化された女性の影が色濃く露呈しているのが分る。